

日本中世における市庭と広場

藤田裕嗣

はじめに

一 歴史地理学の研究史からの問題設定

二 市庭景観の諸類型と市舎

論文要旨

本研究では本共同研究の課題と問題点のうち「中世の市場を広場と把握できるか」との問題設定をまず受ける。日本中世史学では中世初期の市は広場で開かれたとする見解がある。このような市庭観を念頭に置きつつ、この問題設定に対して歴史地理学の立場から私見・見通しを提示するものである。

市庭に関する小林健太郎による歴史地理学研究の問題点として、戦国期の市屋敷・町屋敷から成る中心集落で市が開かれた場合の場所が問題にされていない点が指摘できる。これは、共同研究の課題との関わりではへその場所は広場と認められるかという問題となる。

そして、市庭と広場との関係を考えるのに、まず日本中世史学で既に広場として指摘されている中世初期の市庭から、歴史地理学で問題とされてきた戦国期の市屋敷・町屋敷に至るまでの間の形態について、「市庭景観の諸類型

三 絵画史料との対話

四 市庭と広場

おわりに

と理念的变化系列」というモデル図(図1)を用いて説明した。そのうち、中世初期と戦国期との間でキーワードとなる市舎について文書史料での出現形態を問題にした。このような文書史料に比べて、市の景観を説明するのにより有効性をもつ絵画史料を次に検討した。その上で「市庭景観の諸類型と理念的变化系列」のモデル図(図1)をもとに平面図に展開した図(図4)を提示し、広場との関わりに関する私見を主に説明した。

結論としては、今回の問題に対する試案として、町場へと発展し、町並が形成される段階に至っても、町屋の軒先を借りるという形で市が開かれることによって、町屋がとりつく道の一部が市庭として認定されたのではなかったか、その部分が広場とも見なせよう、ということになる。